

ぼうさい通信 Vol.70

毎月16日は「防災教育啓発の日」

今月のテーマ



令和5年10月16日発行
熊本県立湧心館高等学校

「火山による自然災害について」

様々な自然災害がありますが、阿蘇山を抱える熊本で注意が必要なものが「火山災害」です。九州では、1991年（平成3年）6月3日16時8分頃、長崎県の島原半島にある雲仙岳（普賢岳）で大規模な火砕流が発生し、43人が死亡・行方不明となる火山噴火が起きており、風化させてはならない出来事といえます。その後、平成26年9月27日、午前11時52分。御嶽山（おんたけさん）＝長野、岐阜両県の噴火で58人が死亡、5人が行方不明となった戦後最悪の火山災害が発生しています。生存者の貴重な体験を抜粋しました。



御嶽山頂上付近のハ丁ダルミを上っていた女性が撮影した噴火直後の御嶽山（女性提供）

異変は音で気づいた。何かがはじけるような「ポン」という感じだったと記憶している。音がした方向を見ると、黒煙がモクモクと上がっていた。

午前11時52分。御嶽山噴火。だが現実と受け止められなかった。「まさか、この山とは思わず、どこか他の山かなという感じで…」。においや揺れといった確たる変化もなかつたため、直後は周囲の登山客と同様に噴煙を写真に収めていた。

現実を突きつけられたのは10秒ほど後。気付くと周囲は真っ暗に。「逃げる時間はなかった」。近くに身を隠せるような岩も見えたが「その場で立ち尽くすというか、動けなかつた」。噴煙は、もう目前に迫っていた。

想像もできなかつた御嶽山の噴火。女性は迫り来る噴煙に背を向けるしかなかつた。「（噴煙は熱く）サウナに入ったような感じで『焼け死ぬのか、溶けるのかな』と思った。」

噴石が襲ってきたのは噴火から1分もしないところだった。山梨県富士山科学研究所の試算では、火口から噴石が出た速度（初速）は時速360～540キロ。地面に衝突した際の速度は最低でも108キロだったという。女性にもそんな噴石が容赦なく襲い、ザックで隠れていない後頭部や腰を直撃した。「折れたかなと思うほど、これまで受けたことのない衝撃」。実際に腰の軟骨は折れていた。

噴石の勢いが少し弱まつたとき、近くで一緒にしゃがんでいた男性が声をかけてきた。「起き上がりながら起こしてくれ」。男性の体を支えてあげたが、すぐにはばったり前に倒れた。どうすることもできず、男性の口に付いた灰をぬぐってあげるしかなかつた。



御嶽山頂上付近、ハ丁ダルミを通る登山ルートと救出されたルート。

その直後、噴石が再度襲ってきた。最初より激しく降り注いだ噴石は次々と体に直撃、最後に身体が地面に沈むくらいの衝撃を左腕に受けた。「痛い、熱い、しびれ。味わったことのない感覚だった」

噴石の勢いが弱まり、体を起こした。（中略）

無事だった登山客に下山しようと言われたが、貧血がひどく、腰にも違和感があった。「歩けない」。その場に残る決断をした。

100メートルほど離れた場所に、身を隠せそうな石造りの台座を見つけた。左腕を抱き、何度も気を失いながら、足とお尻を使い、尺取り虫のように進んだ。

途中にうずくまる登山客の男性がいた。「一緒に行きませんか」。声を掛けると、男性は時間をかけて台座近くまで来た。

長い時間を費やして移動し、台座を背にしたころには日が沈みかけていた。台座周辺には別の男性が一人いて、携帯電話で通話していた。相手は家族だろうか。「今噴火にあって、ちょっと無理かもしれないけど、俺は絶対に帰るから」。そう告げていた。

ふと携帯電話をみると、一緒に登っていた友人から何度も着信があった形跡があった。友人は無事だったんだ。少しだけほっとして折り返し電話を掛けた。

夜になるにつれ風が強くなり、標高3千メートルの過酷な環境が女性たちを襲った。女性は日が暮れる前、台座の前を歩いて通り過ぎようとした男性に頼み、ザックの中からダウンジャケットと簡易テントを出してもらい、防寒対策として体に巻きつけていた。周りが暗くなる中、ただ寒さに耐えた。

長野地方気象台によると、標高1千メートル付近にある御嶽山麓の開田高原で噴火翌朝の最低気温は6・6度。女性が一夜を過ごした標高3千メートル付近は氷点下だったことが想像される。過酷な環境に耐えられたのは、携帯電話から聞こえた友人の励ましの声だった。「私がここで死んだら友人はきっと自責の念にかられる。だから生き抜こう」。勇気を振り絞った。（以下、略）御嶽山噴火1年、生還女性が初めて語る「あの時」「焼け死ぬのか、溶けるのかな…」

（産経新聞 2015年9月28日発行より）

噴火から一夜明けた平成26年9月28日午前11時半。火口付近のハ丁ダルミにある石像の台座に寄りかかった女性（右上の丸の中に写っている）は、自衛隊などのヘリに救助された。女性の生死を分けたのは何だったのだろうか。「御嶽山は初心者でも気軽に登ることができるだけに、十分な準備をしている方は少なかった。生き残れたのは運もあるが最低限の準備をしていったからだ」と言っている。女性は登山の際、日帰りでも簡易テントは必ず携行し、3千メートル級の山にはダウンジャケットも持っていた。夜になるまで生存していながら周囲で亡くなった登山客は、ダウンジャケットや簡易テントは持っていないかったようだった。生死を分けたのは「その差」と思っている。「もし山へ行かれる方は、リスクを考え準備をしてほしい」。最後にそう訴えている。

御嶽山同様、死者を出している前兆のない噴火に対して、どのようにすれば災害を減らしていくけるのか。昔は、白装束（死んでもよいという覚悟を示している）で登山したといわれるが、どちらの火山も今はロープウェイで中腹まで軽装で簡単に進行する。ただ、この女性が生き残ったのは運が良かっただけではなく、夏場なのにダウンジャケットや簡易テントを持って行ったことが大きい。（ヘルメットを装着すれば、さらに生存率は上がる。）

その他にも、火山ごとに作成されている、何処に、どのような危険があるかを示したハザードマップ、火山災害予測図を確認しておくと良い。火山の噴火を止めることはできないが、このハザードマップをうまく利用してリスクを回避することは可能となるはずである。

過去のぼうさい通信を見ることができます ◎ぼうさい通信(毎月16日発行)

本校HPにアクセスしてみよう。 <https://sh.higo.ed.jp/yusinkan/>

くまもとマイタイムライン（デジタル版 マイタイムライン）は、

<https://portal.bousai.pref.kumamoto.jp/timeline/#/>で作成可能です。



噴火翌日の平成26年9月28日に撮影され、翌日付産経新聞掲載の救助直前の様子。